

ひきこもり家族の教育責任をめぐる語り —問題の認知と「過失」と「援助」の狭間で—

○中央大学 古賀 正義

1. 目的

ひきこもりのスタートを、ある若者は「変な生活の日常化」と表現している。閉じた家庭での日常生活、社会と隔離した内閉的な暮らし方を、家族とりわけ親たちは年を重ねてしだいに「ひきこもり」と呼ばざるをえなくなっていく。だが、ひきこもることが本人にとってどれほど「困った出来事」であるかは定かではなく、ましてや当事者にとっての「切迫した問題」と呼んでいいのかどうかも定かではない。ひきこもりが「曖昧な現象」（萩野ほか 2008）として当事者を悩ましていくのは、親が本人を来院させるのさえ苦勞であるといわれるように、「問題ならざる問題」の出来事に翻弄され続ける長い家庭内の、そして親子間の葛藤のプロセスがあるからに相違ない。

2. 方法

公式調査によって示されてきたひきこもりの実態は、社会参加不能な若者の膨大さへの驚きを世論に与えた。見えにくく、親にすら認知しがたいひきこもり問題の可視化であった。そこでは親たちの「クレーム」（声をあげる機会）が必要とされた（Best2008）。もちろん、精神医学者など専門家の指摘は重要であり、メディア報道も影響が大きい。初発の問題発見者すなわち困難を訴える当事者は本人である以上にむしろ、家族とりわけ親たちであるといえることができる。

2008年に実施された東京都調査では、従来KHJなど個別な親の会の調査に依存してきた、親たちへのアンケート調査（主に支援団体等から調査票を配布し185票を回収）を総合的に実施するとともに、20家庭に及ぶインタビュー調査（主に支援機関等に協力者を依頼）を実施し、親たちのひきこもり問題理解に実証的に接近することを試みた。家族が問題の困難を感じ相談に向かうあり様と支援を受けて自らも問題解決に向かうあり様を、親たちの語りのなかから具体的に描き出した。そこには、問題の発見者・構成者でありながらかつ問題の理解者・支援者でもある、アンビバレントな親たちの立場性が浮かび上がる（古賀・石川編 2018『ひきこもりと家族の社会学』世界思想社）。

3. 結果

例えば、専門管理職の父と母をもつ30代の若者の事例。彼は、私立付属高校・有名私立大学とトントン拍子に進学した。高校での成績はよく、大学でも全く欠席がなく、試験準備もきちんとするので、学校の「成功者」とみえた。卒業時に、デスクワーカーとして公務員になりたいと言って、試験を受験するが合格しなかった。ここから家で「就職浪人」の生活が始まる。毎日几帳面に決まった時間に起き、部屋もきれいにして生真面目に家事も手伝うなど、家の中で宅浪生活するパターンが継続する。そのうち、しだいにコンビニ以外まったく外出しなくなった。ブラインドを下ろし、近所の目を気にして宅急便の配達すら受け取らない日々へと進む。本当に問題と実感したのは、数年の歳月がたってからであったという（事例等、調査結果の詳細は当日資料配布）。

この事例にあるように、親たちは今まで必要な働きかけを行ってこなかったのかもしれないと思えば後悔する一方で、将来を考えて具体的な方法を提案する。だが本人に相手にされないということを繰り返す。過失の感覚と援助の感覚がせめぎ合い、他人に話していいのか、何をどうやっていいのかを迷い続ける。家の中で本人の小さな変化と向きあい、親は「自立」を子どもに手探りで求めていく。

4. 結論

ひきこもり問題では、当初は家庭的な資源が豊かなケースが多く、その長期化によって、退職や高齢化など家庭の基盤を破壊され、行き場を失うことが多い。若者を「自立させない」と家族が共倒れしてしまうという冷酷な現実が待ち受け、周囲への問題の秘匿に始まって「過失」と「支援」の板挟みが親たちを苛む。この調査から、日本社会は長い間「家族主義」の伝統を保ってきたが、家族の自助努力だけで問題が解決するという夢から今日脱却しなくてはならなくなっているといえよう。